

## 民族解放はパレスチナ人の命を救わない

### 我々は断固としてこのジェノサイドに反対する

過去 2 年間で、イスラエルは 6 万 5 千人から 68 万人のパレスチナ人を殺害した[1]。これは無差別爆撃、ガザ地区全域への地上侵攻、そしてほぼ全民間人の強制移住という作戦によるものである。イスラエル国家の行動が、グローバル資本の蓄積の利益のために道を拓くための大規模な民族浄化を構成していることは明らかである。重要なのは、こうした政策が過去 2 年間に始まったものではなく、1948 年のナクバ（大災厄）以来イスラエルが継続してきた民族浄化の激化に過ぎない点だ。この現実を認めない者は、この問題について論じる資格はない。

世界が目当たりにするこの絶滅政策に対し、イスラエルへの物質的支援に反対する運動が地球規模で出現している。本稿は主にこうした運動の参加者に向けて執筆する。我々は彼らに深く共感しているからだ。しかし、私たちがこれらの運動に参加し、その行動を観察する中で確信したのは、この虐殺の原因を完全に理論的に理解している者は稀であり、そのような唯物論的世界観の欠如から導かれる結論は、この虐殺の究極の原因である資本主義体制に効果的に立ち向かう能力をさらに失わせるだけだということである。

過去や現在の出来事を議論し、完全な理論的明晰さなしに行動するだけでは不十分だ。我々はそれらの全容、原因、そして実際にこうした残虐行為を終わらせるために取るべき行動方針について批判的に考えねばならない。全世界が苦しめられている資本主義が存続しているのは、虐殺という手段に加えて、革命的エネルギーを吸い上げ、資本主義の最悪の弊害だけを標的にするよう仕向けて、「組織的な袋小路」へ押し込めてしまうことで存続しているからなのだ。我々は枝葉ではなく根幹を攻撃しなければならない。つまり、こうした虐殺を実際に終わらせるためには、まず資本主義を打倒する方法を知り、さらに資本主義打倒が実際に何を意味するのかを理解するために自らを教育しなければならない。

### 非共産主義左派の理想主義的抽象論

確かに、資本主義が継続するパレスチナ人虐殺の原因であると言うのは、かなり議論を呼ぶ主張かもしれない。虐殺に反対する者でさえ、資本主義がそのような虐殺が起こるための枠組みを提供した、いやむしろ資本主義がそれを起こすよう促したということを否定することは稀である。それにもかかわらず、多くの組織や個人は、継続する虐殺が資本主義によって引き起こされ、資本主義と切り離せない形で続いていることを認めることに依然として躊躇している。

この躊躇には多くの原因があるが、最も明白なのは、資本主義が人種差別、ナショナリズム、帝国主義、性差別といった他の抑圧的システムや信念を直接的に生み出し、さらにそれらを形作る仕組みについての唯物論的理解の欠如である。このような欠陥のある観念論的世界観は、非共産主義左派内で広く受け入れられている「交差性（Intersectionality）」という概念に極めて明確に見て取れる。定義上、交差性とは：

「人種、階級、性別などの社会的分類が相互に関連し合い、重複し相互依存する差別や不利な状況のシステムを形成すると見なされる性質；そのような前提に基づく理論的アプローチ。」

-オックスフォード辞典

一見すると、これは世界の仕組みに対する正しい理解のように思える。確かに我々は、資本主義が人種差別、性差別、帝国主義といったシステムと相互に関連していることを否定しない。我々が異議を唱えるのは、階級が（仮に存在したとしても）他の抑圧形態と同等の立場にあり、ある点ではそれらから独立していると描かれるという考え方である。これは歴史的に明らかに誤りであることが証明されてきた概念だ。社会制度としての現代的人種差別は、搾取手段を正当化するためにその創設を必要とした重商主義的（初期資本主義的）奴隷制以前には存在しなかった。性差別は古代から存在するが、その現れ方は常にそれを強制し形成した階級関係に依存してきた。帝国主義が世界的な制度となったのは、自己増殖に駆られた資本が継続的な成長と搾取のために新たな市場を必要とした時だけである。

こうした理解の欠如、そしてより重要なその帰結は、様々な非共産主義左派組織のプロパガンダとそれに続く行動に見られる。彼らは絶えず、虐殺の責任を資本主義という包括的な世界システムではなく、個人や思想、国家に帰する。そして結果として（意図的か無自覚かにかかわらず）、その根源である資本主義ではなく、これらの個人や思想、国家と戦わねばならないと主張するのである。例えば社会主義解放党の記事「トランプはイスラエルのイラン攻撃の完全な共犯者、拡大戦争の危険性」[2]は次のように述べている：

「ドナルド・トランプは、イスラエルによるイラン侵攻の共同設計者であり、全世界が直面する異常な危険について、ベンジャミン・ネタニヤフと全責任を共有している」

-社会主義解放党

特筆すべきは、この記事が資本、資本主義、資本家、利潤、社会主義、労働、プロレタリアート、労働者といった言葉は一切言及していない点だ。自称社会主義組織としては確かに奇妙なことである。我々でさえ驚いたのは、トランプ政権以前の政府が同様の帝国主義政策を取っていた事実すら一切言及しないという彼らの決断だ。その結果、彼らは責任を、彼らは責任を、世界各国の支配階級——国際ブルジョアジーではなく、特定の国家間の対立や個々の国家元首の肩に押しつけている。本質的に支配階級のナショナリズムのプロパガンダを繰り返し、それを共産主義的レトリックとして彼らにすり替えている。

彼らが「労働者階級の現状に合わせる」戦略の一環として、このような露骨な階級闘争放棄を行ったと主張しようとも、その戦略の結果は同じである。実際の階級闘争を改良主義へと転換させることだ。彼らは既存のブルジョア世界システムを覆す意思がないことを露呈している。むしろ、同じ記事内の声明で自らを国際的ブルジョア法の先鋒と見なしている。

「誤解のないように申し上げるが、イスラエルによるイランへの戦争は国連憲章の明らかな違反であり、したがって国際法違反である。」

—社会主義解放党

共産主義の真の目的を広めることを拒むのは非共産主義的だが、世界に対するブルジョア支配の機構を所与のものとして固定化して前提にしてしまうことは、疑いなく反共産主義的である。このような教条は空から降ってきたものではなく、パレスチナ虐殺のような残虐行為の原因を観念論的に理解した結果として生じたものである。

## なぜ資本主義はこのような残虐行為を引き起こすのか？

最も単純に言えば、資本主義はその必然的な発展過程である資本蓄積を通じて、労働者階級の大部分を余剰化していく傾向があるため、このような残虐行為を引き起こす。これは資本主義とは別の特別に抵抗すべき新たな傾向

などではなく（そもそも、そんなことは不可能だ）、資本主義そのものが存在する限り現れ出てきた、システムの本質的なものである。

この現象が生じる理由を簡潔に説明すると、ブルジョワジー（プロレタリアートが生み出す剰余価値の収奪によるのみ富を得る者たち）は、相互の競争により、可能な限り低い価値で商品を生産せざるを得ない。価値（資本主義下では社会的に必要とされる労働時間のみによって決定される）は、この方法によって最適化されねばならない。具体的には、資本（機械）を用いて特定商品の生産に費やす労働時間を削減するか、労働者階級をますます搾取する（労働力に対する賃金を減らすなど）かのいずれかである。これはつまり、ブルジョワジーは自らの競争によって、不要となった職種の労働者を解雇せざるを得ず、その結果、プロレタリアートの大部分が貧困化するということを意味する。この背後にある実際の経済学に関するさらなる説明は、本稿の末尾にリンクしている。

ここで重要なのは、この大規模な貧困化に対して、プロレタリアートが飛躍的に自らの集团的利益を体制に対して認識し、自らの生存を最もよく守るために最善と考える行動を取るだろうという点である。資本主義の物質的条件によってもたらされた労働者階級内のこの急進主義は、資本破壊の源泉であると同時に、ブルジョアジーが階級としての自らの生存を守るため、国籍・人種・宗教・性的指向・性別といった恣意的な区別によって労働者階級を分断し、曖昧化と虚偽によって非共産主義的形態へと歪めてきたものである。

米国では、資本主義の各発展段階における移民政策の歴史的転換と、それに続く人種差別的態度・抑圧の拡散を通じて、この過程が最も明瞭に観察できる。ブルジョア国家が代表する階級の必要性に応じて、海外からの移民を容認と追放の循環的性質は、時計仕掛けのように追跡可能である。第一次世界大戦と第二次世界大戦の両期間において、資本が大量の成長を必要とした状況下で、国家は移民政策を緩和し、多数の移民労働者の国内流入を許容した。その後、停滞期に入ると、これらの政策は覆され、移民に対する国家による抑圧に置き換えられたのである。

このような抑圧的な政府政策が採られたのは、政府が悪意を持っていたからではなく、増大する剰余労働力による貧困化に直面したプロレタリアートが、資本主義体制の打倒に向かうのを防ぐには、経済全体での有用性を維持するために彼らの仲間の一部を犠牲にさせるしか方法がなかったからである。

これはもちろんアメリカ特有の現象ではなく、同様のパターンは世界的に見られる。ホロコースト[3]、アルメニア人虐殺[4]、そして言うまでもなくパレスチナ人虐殺は、資本主義下の経済的現実が虐殺を招く一例に過ぎない。ナクバ（大災厄）は明らかに、ユダヤ人がパレスチナ人を本質的に憎んでいたからでも、その逆でもない。資本が自らの利益に最も適すと考えた膨大な数のイスラエル入植者をこの地域に住まわせるために、パレスチナ人を強制的に追い出し、その財産を収奪する必要があったからである。それ以来、パレスチナ人は、資本によってこの地域に抑え込まれ、権利を奪われた予備労働軍として扱われてきた。資本の成長が必要とする時には動員され、資本がイスラエルのプロレタリアートへの譲歩として必要とする時には解雇される存在である。イスラエルと世界の資本主義システム全体の現在の経済状況において、資本主義経済にパレスチナ人の居場所などは存在しない。資本主義システム全体に抵抗することなく、資本のこの特定の現れに抵抗しようとするのは、自然の法則を変えようとするようなものだ。

共産主義活動家の役割は、常に、あらゆる時点における労働者階級の特定層の闘争を、労働者階級全体の歴史的抑圧と結びつけることにある。我々の任務は、過去に同様のジェノサイドが発生した事実を絶えず指摘し、その発生原因を解明するだけでなく（今まさにそうしたように）、過去にどのように反対運動が展開されたかという血で学んだ教訓を活用し、真にジェノサイドに反対しようとする者たちに、この目標を達成するために有効な手段と無効な手段を教えることにある。この理論的理解を深めることが、戦略と行動を導き、過去に陥った様々な誤解や落とし穴を回避する手助けとなる。これは歴史の講義ではない。過去の過ちと成功についての批判的分析であり、世界の闘う労働者たち

が生涯をかけて自ら学んできた教訓の継承である。我々がそれらの誤った思想やそれを信じる者たちを批判するのは、帝国主義による虐殺の未来の犠牲者たちのためであり、我々の大義によって解放されるべき全人類のためである。

## 民族解放への全面支持に反対して

最も明白に非共産主義的で、効果のない形態を取った実践主義は、パレスチナの民族解放（そしてそれゆえに民族性の概念）をそれ自体として価値ある、あるいは必要な目的として全面的に支持すると宣言する組織で見られる。これらの組織は大きく二つのカテゴリーに分類される。第一に、民族解放を擁護することのみを目的として存在する組織。第二は、社会主義の教義を歪曲し、それによって社会主義は民族解放を支持すべきだと主張する組織である。いずれのグループも最終的にジェノサイドの根本原因に対処できず、社会主義戦略の一環としてナショナリズムと民族解放を提唱するこれらの組織こそが、左翼内部で最も危険な傾向を体現している。以下、共産主義を推進する手段として民族解放を唱えるこのイデオロギー的傾向に属する諸組織を、穏やかならぬが、その信条を正確に言い当てる呼称として、「国家社会主義者」と呼ぶ。

国家社会主義者たちがそうするように、パレスチナの民族解放のみを主張することは、結局のところ、民族的境界線に沿って虐殺されている人々に対する裏切りである。このアプローチは、資本主義の帝国主義的側面のみに対処し、それを生み出すより大きなシステム自体に挑むことはない。反帝国主義が反資本主義を伴わない場合、それは根本原因ではなく症状と闘うことに過ぎず、この道はさらなるジェノサイドと帝国主義戦争へとしか導かない。このようなアプローチは本質的に、（仮に成功したとしても）新たな国家を生み出す闘争へと至るが、その国家自体が資本主義の帝国主義システムに加担せざるを得なくなる。この事実は単なる理論ではなく、民族および民族解放運動の歴史によって裏付けられたものだ。

これらの国家社会主義者たちは、1990年以前のルワンダにおいて、植民地勢力が支援するツチ政権を打倒しようとするフツ族の闘争を支持しただろうか？ ツチ政権打倒以前、フツ族がツチ族によって非常に現実的かつ物質的な形で抑圧されていたことは否定できない。イスラエルと同様に、ツチ政権も新植民地主義の目的のために帝国主義的資本主義陣営から支援を受けていた。状況は当然異なる。ツチ自身が国外から侵入しフツを土地から追い出したわけではないからだ。しかし、土地への血縁的結びつきや歴史的伝統が、ある社会主義組織が「どの民族が暴力的に土地を主張する権利を支持すべきか」を決める唯一の根拠であるならば、彼らが社会主義者ではなく、血と土の教義を守る反動的勢力であることは明らかだろう。

何十年にもわたり、様々なフツ民族解放組織がツチ政権の打倒を試みたが、パレスチナ民族解放運動と同様に失敗に終わった。もちろん、帝国主義諸国がツチ族ではなくフツ族を支援することが自国の利益にかなうと判断した時点で、この状況は一変した。今日のアメリカ資本の利益はイスラエル国家のそれと深く結びついているが、ハマスがイスラエルとカタールから資金提供を受けていたことは既に周知の事実である。また、シリアとイランがこの地域の紛争に代理戦争として関与してきたことも、容易に確認できる事実である。

1972年、『ワーカーズ・ヴァンガード』（我々が全面的に見解を共有しないトロツキスト—Spartacist League/U.S.系新聞）はこう記した。「抑圧された者のナショナリズムもまた高尚ではない。パレスチナのアラブ人が、抑圧された者のナショナリズムが抑圧者へと転じた犠牲者であることを忘れてはならない」ブルンジでは、支配的少数派ツチに対するフツのクーデターが成功していれば、被抑圧者の部族主義は抑圧者の虐殺的ナショナリズムへと変質していただろう。あらゆるナショナリズムは反動的である。なぜなら成功したナショナリズムは虐殺に等しいからだ」と記した[5]。1994年にフツが実際にツチに対するクーデターに成功した後の出来事を振り返れば、この予言は驚くべき先見性を帯びている。

今日、我々が理解するのは難しいかもしれないが、資本主義下で突然立場が逆転し、パレスチナ人がイスラエル人（PSL—社会主義解放党のような国家社会主義政党の人種差別的教条とは異なり、ブルックリンから進んでイスラエルにきたネポ・ベイビーばかりではない）に対する民族浄化運動を展開する力を握る世界が存在する可能性は否定できない。しかし、この地域の勢力均衡が突然変化するには、西側諸国がパレスチナ衛星国家への支援が自らの目標に適していると判断するか、あるいは中国資本主義が西側諸国との地域競争が自らの持続的成長に必要であり、自国の影響圏内にパレスチナ国家の創設を成功裏に強制すると決断するだけで十分である。

こうした事態の展開において、パレスチナの民族解放をめぐる浸透工作と結集運動の全勢力は、たちまちナチス勢力の頭上に跳ね返り、あらゆる非共産主義運動がそうであるように、資本によって吸収され、その利益にさらに直接的に奉仕するものへと変質するだろう。

パレスチナの民族解放運動がイスラエルのナショナリズムを打倒できるかどうかは予測不可能だが、その運動が失敗に終わろうと成功しようと、歴史分析から導かれる結果は極めて明白である。ルワンダはその一例に過ぎない。クメール・ルージュ支配下のカンボジア、1995年のボスニア、2003年以降のダルフル、ミャンマーのロヒンギヤ、エチオピアのティグライ、そして現在スーダンで非アラブ系住民であるマサリット族が直面している状況を見れば、同じプロセスが時代を超えて繰り返されていることがわかる。

民族解放が共産主義社会の基盤となり得る方法など存在せず、共産主義者が資本主義の駒とならずにこれを支持する方法も存在しない。

## 民族解放運動の支持、不支持は、実際には何を意味するのか

この点を踏まえ、非共産主義左派組織による支援が実際に何を意味するのかも問わねばならない。この広範な議論の中で、パレスチナ人の虐殺抵抗運動への支援の本質について、多くの混乱と誤った理解が見られる。支配階級のプロパガンダ機関が繰り返す嘘とは裏腹に、アメリカの抗議者がハマスに武器を送っているわけではない。いや、民族解放への支援を語る道徳的説教が意味するのは、抗議運動を通じて支配階級に政治的圧力をかけ、虐殺を止めさせることを期待するに過ぎない。

武器供与停止を政府に迫るといふ、この親パレスチナ抗議運動の目的は、絶対に不十分である。資本主義下では、抗議運動はこうした譲歩を強制できず、また強制することすらできない。権力が完全に支配階級にあるため、彼らは特定の抗議運動や少数派政治運動の要求をどれほど長く無視するか、完全に選択できるのだ。支配階級の意思決定プロセスにおいて、政治的圧力が達成するのは、彼らの目標（民族浄化とイスラエル入植地建設による利益搾取）を達成するのに最適な手段を正確に計算する手助けに過ぎない。もし米国が武器供与を停止させられたとしても、その武器をドイツに譲渡し、代わりにドイツがイスラエル国防軍（IDF）に武器を供給する可能性がある。あるいは米軍は、これが紛争である以上、単に活動を公衆から隠蔽し、この虐殺への支援を停止したと主張しながら実際には継続するという選択もできる。我々は根本的に、労働者が政府の行動を完全に把握できる社会に生きていない。政府自身が伝える情報しか得られないのだ。したがって、支配階級は、変化を求める労働者階級の抗議運動による圧力を取り込む、誤導する、あるいは完全に無視する無限の方法を有している。このプロセス全体が、支配階級が全ての主導権を握る状況下で進行しているからである。

世界中の様々な民族解放運動への支持表明が実際に持つ効果の欠如（たとえ特定の地域の民族ブルジョアジーが、ある帝国主義ブロックから別のブロックへ国際プロレタリアートの一派を搾取する体制を確立するのを助けることさえ、民族解放が実際に意味する全てであるにもかかわらず）は、プロレタリアートとブルジョアジーの実際の闘争において、

自らを共産主義者と呼ぶ組織の任務に、国際主義へのあからさまな無視が及ぼす甚大な破壊的影響と対比されねばならない。共産主義組織は、資本主義下で労働者の権利や生命を自ら守ることも、革命を自ら主導して勝利させることも、資本主義をより良い方向へ導くこともできない。闘争的労働者組織（あるいはあらゆる主体）が、地球規模の資本主義という包括的システムから人類と地球を救うために実際に何かを成し得る唯一の道は、資本の危機をそれを超越する革命へと転換する準備を整えることである。この準備の鍵は、階級が自らの歴史的利益を記憶する一貫した主体となり、この知識を労働者階級全体に広める一貫した声となることにある。この両領域において、共産主義組織による民族解放への支援は、資本主義システムの抽象的な枠組み（民族や国家、主権といった区分）に迎合し、民族主義的境界線で国際的連帯を分断するだけである。このため、それは反共産主義的かつ反革命的実践とみなすほかに、真の共産主義者はこれを明確に非難すべきである。

## 機会主義的批判的支援への反対

パレスチナの民族解放への全面的支援とは対照的に、左派の一部セクトには相反する論理が存在する。彼らはパレスチナの民族解放をそれ自体が目的として支援するのではなく、「帝国」を弱体化させる民族解放運動であり、さらなる行動を促す労働者階級の成功した動員事例であるという理由でこれを支持する。しばしば、両方の視点を行き来するハイブリッドなアプローチさえ見られる。例えば PSL は別の記事でこう述べている。

「この（民族解放への支持）は、米国の運動にとって道義的に正しい立場であるだけでなく、戦略的必要性でもある。パレスチナ人の抑圧を支持し、そこから利益を得る資本家階級は、米国内で貧困、不平等、不安定を生み出すのと同じ資本家階級である。したがって、それらの資本家がパレスチナに対する支配力を失えば、ここで労働者階級運動は恩恵を受けるだろう。同様に、もしそれらの資本家が米国労働者階級に対する支配力を失えば、パレスチナ解放闘争も利益を得るだろう。国際的連帯は、共通の敵に対する多面的な強力な労働者階級運動を構築するために必要な手段である。」

-社会主義解放党[6]

この立場を読み、それが真のプロレタリア国際主義を表しているとは同意するのは理解できる。結局のところ、あらゆる戦争において自国のブルジョアジーと闘い、国際的連帯の必要性を認識する義務があるという点で、彼らの主張は正しい。問題は、彼らが「パレスチナ解放」との連帯を具体的にどう定義しているかに目を向けた時に生じる。なぜなら、彼らが実質的に意味しているのはパレスチナの民族解放への支持であって、パレスチナ労働者階級の解放への支持ではないからだ。

民族解放を国際的プロレタリア革命の代替物や踏み台と混同するならば、我々は共産主義から遠ざかる方向へと進み続ける。あらゆる形態のナショナリズム、たとえ弱者側のナショナリズムでさえ、反共産主義的目標である。同様に階級協調も、国境も支配階級もない解放された人類を実現しようとする者たちにとって、破滅と死をもたらすだけの手段に過ぎない。

我々が存在する世界では、巨大な帝国主義勢力ブロックが絶えず互いに影響力を争っているため、我々の理論と行動は資本主義体制そのものに直接対抗するものでなければならず、体制の一要素や支配階級の一派閥を他派閥に対して支援するものであってはならない。

ハマス指導部は、主にイランをはじめとする他の帝国主義ブロックの資本主義支配階級のための民兵組織として機能し、その抑圧的な支配形態を覆い隠すためのプロパガンダとしてパレスチナ民族主義のイデオロギーを利用している。これは、我々が鼻をつまんで批判的支援を行うならば、民族主義運動や資本主義国家との協力やシンパシーを招く非

常に危険な動きへの扉を開くことになる。過去 100 年にわたる反革命の中で共産主義者が学んだ教訓があるとすれば、それは、統一され解放された人類という我々の目標を支持しないいかなる大義とも協力したり、いかなる形であれ支持したりしてはならないということである。独立したパレスチナ国家の創設は、他の影響にかかわらず、革命を組織し新たな社会を確立するという国際的労働者階級の任務の助けにならないことは明らかである。

国際主義的共産主義傾向が雄弁に述べているように：

「民族解放の事業、いわゆる『民族自決権』は、資本主義の帝国主義段階が始まるにつれて完成したブルジョアジーの事業である。今日、民族ブルジョアジーが民族解放の事業を遂行する能力は、主要な帝国主義大国からの支援と資本を動員する能力に完全に依存している。これはイスラエルそのものを生み出した闘争から明らかであった」[7]

—インターナショナリスト・コミュニスト・テンデンス—Internationalist Communist Tendency

国家の解体と創設は、様々な資本主義陣営間の競争と闘争の枠組みに完全に組み込まれており、したがって世界の労働者が真の正当性をもって扱うべきものではない。このことは、1947 年にソビエト連邦がイスラエル国家の創設を支持した際に明らかになった。外交的には最初に公式承認した国家として、また物質的には当時ソビエト陣営の一部であったチェコスロバキアから武器を送り、その建国を支援したのである。この支援は「偉大で本物の」ソ連によって行われたが、それは虐殺から脱したばかりの集団の民族自決権を支持したいからではなく、帝国主義的な英仏の地域支配に決定的な打撃を与え、自らがブルジョア的世界勢力としての野望を支えるためであった。

周知の通り、ユダヤ民族のかなりの部分の願望は、パレスチナ問題とその将来の統治と結びついている。この事実はほとんど証明を要しない。… 先の大戦中、ユダヤ民族は並外れた悲しみと苦難を経験した。…

国際連合はこの状況を見過ぐすことはできず、また見過ぐしてはならない。なぜなら、それは憲章に掲げられた崇高な原則と相容れないからである。…

西欧諸国はいずれも、ユダヤ民族の基本的権利を擁護し、ファシストの虐殺者たちの暴力から守ることに失敗した。この事実こそが、ユダヤ人が自らの国家を樹立しようとする願望を説明している。この点を考慮せず、ユダヤ民族がこの願望を実現する権利を否定することは不当である。」

—ソ連大使 アンドレイ・グロムイコ 1947 年 5 月 14 日

## 実際に何をすべきか？

もし民族解放を支援することが、実際にはパレスチナ人の命を救わず、資本主義を終焉させず、むしろその正反対の結果をもたらす可能性が高いのなら、虐殺を終わらせるために実際に何ができるのか？

私たちはパレスチナ人との連帯を表明する。パレスチナ民族との連帯ではない。なぜなら民族とは、人々を政治的に分断する形態に過ぎないからだ。私たちは、労働者階級の一員として共有するアイデンティティに基づく解放の一部として、彼らと共に真の解放を達成するための継続的な闘争を通じて、パレスチナの労働者階級への支持を表明する。パレスチナ人を特別な扱いが必要な犠牲者として偶像化せず、私たちと同じ主体性と困難な課題を抱える人間として扱う。

抑圧された民衆の支配者層を支持し、彼らが別の支配階級に支配されないようにすることは、すでに計り知れない苦難を経験してきた民衆に対する甚大な裏切りである。私たちがパレスチナ人と連帯を表明するとき、それは民族性、国

籍、政治的指向に基づくのか？それとも、たとえ彼らが数千マイル離れた地に生きていても、私たちが自国の支配階級よりも彼らとより多くの共通点を持っているからなのか？

パレスチナの労働者階級との連帯を示すことは重要である。実際、ほんの少しの共感さえ持つ者にとってそれは避けられない。しかし意図がどうであれ、このパレスチナ人への連帯をその資本主義体制への批判的支援へと変容させる結果は、危険な誤りであり、民族主義の神話と国民国家の正当性の継続へとしか導かない。実質的に、この理論の混同は労働者階級全体とその革命運動に混乱をもたらし、パレスチナ人民と世界の全労働者の自由の可能性を損なう。

世界革命の時が来るまでは、我々は自らと広範な階級を組織化し、パレスチナ労働者を含む全ての労働者が、このような残虐行為を引き起こした資本主義の抑圧的体制を打倒できるようにするだけである。その時が来れば、パレスチナ労働者階級は自らの地域において資本主義体制を打倒する役割を果たすだろう。同時に、この解放の急進的行為に必然的に反撃しようとする反革命勢力に対しても同様である。それまでは、パレスチナ労働者階級の抑圧と支配に加担する勢力そのものを支援することは、無意味であるばかりか直接的な害悪である。

おそらくこの闘争で最も困難なのは、現時点において階級運動がこの進行中のジェノサイド（地球全体の前で起きている虐殺）に及ぼし得る影響がごわずかであることを受け入れることだ。しかし共産主義的組織化の目的は、道徳的正しさを実感させる行為を行うことではなく、現実と向き合うため、今この瞬間の自らの能力の真実を勇気を持って受け入れることにある。改革主義的要求によっても、国家社会主義者や日和見主義者、あるいは露骨な反動的ナショナリストのイデオロギーに結集することによっても、これを止めることはできない。

この虐殺を止めることはできない。スーダンやミャンマー、ウクライナでの虐殺を止められないのと同じように。世界のすべての労働者への連帯を掲げる国際主義的共産主義者としての我々の責務は、この恐ろしい世界において、変化をもたらす能力を絶え間なく組織し、さらに高めていくことである。それは、この世界を覆う体制を打倒する国際革命に向けて築き上げていくことを意味するに他ならない。これは、容易な時だけでなく、特に今のような困難な時代にこそ、苦難を経て獲得した立場と戦略を絶えず守り抜くことを意味する。

我々には勝ち取るべき世界があるが、同時に失うべき世界もある。過去の過ちから学ぶか、それとも繰り返すかだ。資本主義を打倒し、すべての人々が自由な世界を築きたいなら、革命の波に立ち向かう準備ができた共産主義組織だけがそれを成し遂げられる。ある帝国主義ブロックを別のブロックに対して支援したいなら、共産主義の教義を労働者階級の破壊へと歪める様々な国家社会主義組織のいずれかに参加することだ。

そして忘れるな…

社会主義か野蛮か、共産主義か滅亡か——第三の道など存在しない！

---

《関連文献》

資本主義の経済的基盤 / Capitalism's Economic Foundations – The ICT  
<https://www.leftcom.org/en/articles/2022-08-31/capitalism-s-economic-foundations-part-i>

白人種の発明 – セオドア・W・アレン / The Invention of the White Race – Theodore W Allen

## National Liberation Will Not Save Palestinian Lives

1. <https://www.ochaopt.org/content/reported-impact-snapshot-gaza-strip-22-october-2025>
2. <https://liberationnews.org/psl-statement-trump-a-full-partner-in-israels-onslaught-against-iran-risks-wider-war/>
3. <https://libcom.org/article/auschwitz-or-great-alibi>
4. <https://www.leftcom.org/en/articles/2015-08-06/1915-to-2015-a-century-of-genocide> ↵
5. [https://www.marxists.org/history/eto/newspape/workersvanguard/1972/0012\\_00\\_10\\_1972.pdf](https://www.marxists.org/history/eto/newspape/workersvanguard/1972/0012_00_10_1972.pdf) ↵
6. <https://liberationnews.org/palestine-the-struggle-for-national-liberation-and-the-role-of-the-u-s-working-class/> ↵
7. <https://www.leftcom.org/en/articles/2002-11-01/against-israel-against-palestine-for-class-struggle> ↵